

写真と言語の往復を通して、子どもたちの感性と表現力を育てる

－「フォトポエム」の創作活動を通して－

愛媛県松山市立荏原小学校 教諭 石田 年保

ishida-toshi@esnet.ed.jp

キーワード：小学校、国語科、総合的な学習の時間、詩、写真、フォトポエム、表現力、感性

1. はじめに

本実践は、写真と言語を組み合わせた「フォトポエム」という詩を作る活動を通して、子どもたちの感性や表現力を高めることをねらいとしている。

本実践の特徴は3つある。

一つ目は、子どもたちが五感で感じた感動を意識化し、表出させる一つの手だてとして、写真を活用することである。

二つ目は、写真から言葉を引き出し、写真と照らし合わせ言葉を吟味することである。

三つ目は、写真と言語の組み合わせにより、一人ひとりの感性のすばらしさを味わいながら評価しあえることである。

このように、写真と言語を往復しながら詩を作る活動を通して、言語活動を充実させることができると考える。

2. 実践事例

2.1 単元について

学年 第6学年

教科 国語科・総合的な学習（国語科4時間・総合的な学習の時間4時間・全8時間）

単元名「フォトポエムを作ろう」

単元目標

- 写真や言葉の表現の効果を考えたり工夫したりしてフォトポエムを作ることができる。
- 相互評価を通して、一人ひとりの感性や表現のよさを味わうことができる。

単元の流れ

①学習の見通しをもつ→②写真撮影→③写真を選ぶ→④詩を作る→⑤写真と詩を組み合わせる→⑥作品を評価する→⑦学校間で評価し合う

2.2 活動の実際

(1) 感動を意識化し表出させるために写真を撮影する

子どもたちに、「荏原の11月の風景で、『あ・い・う・え・お』を見つけよう」と投げかけ、デジタルカメラで、感嘆詞がつくような驚きや新たな発見を、様々な視点で撮影させた。この写真撮影は、子どもたちが一番楽しいと感じる活動である。

子どもたちの視点として次のようなものが挙げられる。（本学級児童29名が作った58作品から、子どもたちの写真の撮り方を分類した。）

近づく：37.9%・見上げる：22.4%・全体を撮る：10.3%・目線を低くする：8.6%・高い位置から見下ろす：5.2%・のぞき込む：5.2%・隙間にカメラを入れて撮る：3.4%（見ることがで

きない角度）・自分で物を配置して作った構図で撮る：6.9%



写真1 高いところから見下ろしている様子

子どもたちはカメラで撮影するということを通して、自分の感動や発見を写真に記録していく。また、カメラを近づけたり離したり角度を変えたりして、視点を変えて撮影することにより、新たな発見を促すことにもつながる。

(2) 写真から言葉を引き出し、写真と照らし合わせ言葉を吟味する

詩の題材を選ぶ際、自分が撮影した写真の中から、伝えたい思いが強く表れている写真を選択する。この選択により子どもたちは自分の思いやこだわりをはっきりと意識することができる。また、この写真が、言葉を引き出す手がかりになる。

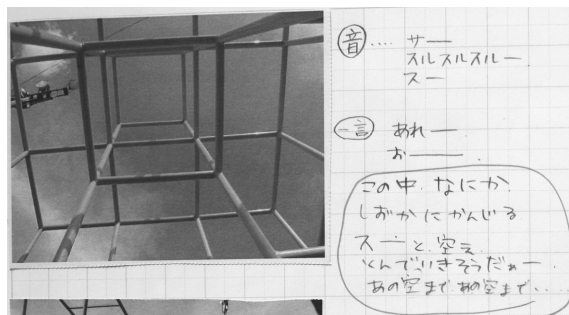


写真2 書き込みメモ

教師も写真を手がかりに、「その時どのような感じだったのか」「なぜ、写真を撮ったのか」「写真で一番伝えたいことは何なのか?」「対象はどんな気持ちなのか」と言葉掛けしながら、子どもの感動の中心や伝えたい思いを見取り、より感動の中心をはっきりさせることで、詩を創作する指導につなげることができる。従来の詩の学習と比べると、どの子どももこの時点での詩作りは抵抗感なく作ることができていた。そのため、学習後、詩を作るのは好きですかという問いに関して、88%の子どもが好きだと答えている。これは、フォトポエムの学習を経験していない子どもたちの数値と比

べると高い。

フォトポエムは、写真と言葉の組み合わせで表現するため、写真と言葉の役割を考えることも必要となる。そのため、写真からどのようなことが伝わるのか、再度写真の読み取りをしたり、詩で伝えていることが写真の説明になっていないか、より効果的な表現になっているか内容を吟味したりする必要がでてくる。また、自分の思いやこだわりと照らし合わせながら言葉を選んだり、表現方法を工夫したりすることができるようになる。

写真からは、形・色・数などの様子を正確に伝えることができるが、音やにおいなどは読み取ることができない。そこで、表現技能を高めるために、今回は擬態語を工夫して表現させた。

子どもたちは、自分の思いにぴったりと合う擬態語を見つけることに苦労をしていたが、その分見つけたときには満足感や達成感を味わうことができたようである。



写真3 できあがったフォトポエム

＜擬態語やデザインを工夫した子どもの感想＞

・私はフォトポエム作りで一番「音」を工夫しました。次に「色使い」を工夫しました。やさしさを表す言葉には、あたたかい色を、風の冷たさを表すときは冷たい色を使うようにしました。フォトポエム作りは難しかったけれど、楽しくできたので「苦」ではありませんでした。フォトポエムの詩に表した自分の気持ちが、フォトポエムから伝わればいいなあと思います。

(3) 一人ひとりの感性のすばらしさを味わいながら評価する

フォトポエムは、写真の撮り方のよさ・詩の言語表現のよさ・写真と詩の組み合わせ方のデザインのよさという、大きく3つの評価の観点がある。そのため、従来よりも多様な観点で評価することが可能となり、より多様な感性や表現を認めることにつながった。これは、学級内の人間関係を深めることにもつながった。

また、フォトポエムは写真と言葉で伝えることができるので、思いを伝えやすいというよさがある。相手がどのような場面から、何を感じ取ったのかがよく分かり、自分との感じ方の違いやよさを味わうことができる。学級内で評価した後、テレビ会議にて学校間で相互評価をした。本実践では、本校6年生(中規模校)と島しょ部3・4年生(複式学級)の異学年交流をし

た。(写真4)学年差を感じることなく、スムーズに相互評価をすることができたのは、フォトポエムの伝わりやすさがあったからだと考える。



写真4 テレビ会議での交流の様子

＜テレビ会議後の子どもの感想＞

・わたしたちの選んだ作品と、ごご島の子どもたちが選んだ作品はぜんぜん違って、6年生と3/4年生の見方は違うんだなと感じました。ごご島の子が選んでいた作品は、写真の撮り方が上手なものが多かったので、今度作るときは、写真の撮り方や「音」に気をつけてつくりたいと思います。

学校間交流では、自分のクラスの作品・相手校の作品それぞれを評価し、その結果を伝え合った。子どもの感想にもあるように、それぞれ選んだ作品は、全く違っていった。学年差・地域の差による感覚の違いや、それぞれの学級の教師の指導方針の違いが作品に表れており、子どもたちは自分たちとは違う表し方に触れ、刺激を受けることができた。また、指導する教師も、相手校の指導のすばらしさを作品から学び、指導技術を高めることにもつながった。

より多くの感性や表現にふれさせ、全体の表現レベルを向上させるために、フォトポエムのコンテストを企画した。このコンテストの入賞作品は、愛媛県の地域ケーブルテレビで3月～数か月間放映される予定である。

3. 成果と課題

フォトポエムの実践を通して、次の3つが成果として挙げられる。

- 自分の感動や心の動きを意識化することができ、苦手意識をもつ子どもたちも進んで詩を創作することができた。そのことが子どもたちの感性を育てることにもつながった。
- 写真と言葉の効果を考え、言葉を精選したり、表現方法を工夫したりしようとすることができ、他の場面でも表現を工夫して思いを伝えようとする姿が見られた。
- 学級内・学校間での評価活動を通して伝える・伝わる喜びを味わい合い、表現活動への興味・関心を高めることができた。

今後、より多くの学校で実践ができるように、教科としてのねらいを明確にし、年間指導計画に位置付けることができるようにしていきたい。